

現代日本における若年層の政治イデオロギー理解の変化をめぐって ー ステナーの権威主義ダイナミック理論が示唆するもの ー

大西 康雄

On the Changes in Young People's Understanding of Political Ideology in Contemporary Japan:
What Stenner's authoritarian dynamic theory suggests

OHNISHI Yasuo

Abstract

In recent years, it is said that Japanese young generation's political ideology understanding becomes different from older generation's understanding. And they say that this phenomenon is specific in Japan. I think it is critical for empirical social survey research on Japanese politics, because political meaning of same ideological terminology may vary with generations. So, I think it needs reconstruction of concept of political ideology for empirical research on Japanese politics. In this article I refer Karen Stenner's Authoritarian dynamic theory and I argue what her theory inspires for concept reconstruction of political ideology.

キーワード：イデオロギー理解、権威主義、不寛容、権威主義のダイナミック

key words: ideological understanding, authoritarianism, intolerance, authoritarian dynamic

1. 問題提起

既に、何人かの論者によって論じられており、またメディアなどでも報じられて広く知られつつある事態であるが、現代日本の若年層において、政治的イデオロギーの対立軸の認識が、より高い年齢層に比べて大きく変化している。事実、筆者の勤務先の学生と話してみても、左翼－右翼、保守－革新（あるいはリベラル）という政治イデオロギーの対立軸にピンと来ていない様子が伺える。

このような事態をどのようにとらえたら良いのだろうか。本稿では、現在の日本でまだ十分知られているとはいえないカレン・ステナーの「権威主義のダイナミック」(Stenner, 2005) という議論を紹介しつつ、イデオロギーの軸なき日本の政治状況を探るための可能性を考えてみたい。

2. 現代日本の若者の政治意識をめぐって

現代日本の若者の政治意識をめぐる問いとして、よく言われるのは、若者は右傾化、保守化しているのか、というものがある。この問いに答えようとしている調査データに基づいた議論として、松谷満(2019)の議論がある。松谷は若者¹⁾の保守化を、右傾化なき保守化、あるいはイデオロギーなき保守化とする。この言葉で意味するものは「排外主義、純化主義といった価値観の右方向への傾きを強めているわけではなく、単に、権威のある者には従ったほうが良いという従属的性格」と論じている。松谷はまず若者の権威主義がどこからきているのかについて重回帰分析で明らかにしようとするが、学歴が権威主義にマイナス効果を持ち、また未婚で親世代家族との同居がプラス効果を持つ以外は、世代効果を打ち消す要因を発見できなかった。さらに、松谷は、若者の政

治的保守化の特徴として、自民党という政党支持よりも安倍首相（当時）個人への支持率の高さを指摘する。そして若者の安倍首相個人への支持の要因として、原発政策への支持が最も大きく、反平等主義や権威主義が弱い効果を持つと指摘している。

また、遠藤晶久、ウィリー・ジョウ（2019＝2016）の1976年から2010年までの調査データを使った議論では、世代によって、「保守」「革新」の意味が異なっていることが指摘されている。例えば、自民党と共産党のイデオロギー距離は、時代が下るにしたがって徐々に縮まっていることを示しているが、その効果は加齢などの効果ではなく世代効果であることを示している。つまり若い世代ほど、自民党と共産党の差を少ないとみていと論じている（遠藤・ジョウ，2019＝2016: 66-69）。また早稲田大学が2012年に実施したウェブ調査では、40代以下の対象者において、自民党や共産党が保守政党と認識され、日本維新の会やみんなの党が革新政党と認識されているという事実も指摘している（遠藤・ジョウ，2019＝2016: 69）。

さらに彼らが指摘するのは、日本と他国との違いである。遠藤らはイタリアのデータを取り上げ、イタリアでは左翼－右翼の認識について世代による分断が見られていないにもかかわらず、日本では世代間で認識の分断が起こっていると指摘しており、このような政治イデオロギー認識の分断が日本特有の現象である可能性を指摘している。

3. ステナーの「権威主義のダイナミック」における議論

では、カレン・ステナーの議論はどのようなものなのだろうか。まず簡単にその要旨をかいつまんで述べると次のようになる。ステナーは、従来の右翼権威主義（Right Wing Authoritarianism: RWA）に関する実証研究の研究諸結果は、それぞれの研究が行われるその時その時の社会状況によって大きく変わってきたという状況があると指摘する。その理由として、従来の右翼権威主義の概念が、本来弁別されるべき複数の要素が入り混

じったものであるとともに、その時その時の政党のアドホックな政策セットの影響もうけているためではないかとの問題提起を行っている。それに対して、その時その時に発現する政治的主張や行動に着目するよりも、より安定したパーソナリティ要素、すなわちステナーの言う権威主義的気質（Authoritarian Predisposition）に着目することにより、右翼権威主義の発露が環境状況次第で変わるという状態をよりきちんと説明できるのではないかと議論している。

権威主義的パーソナリティ研究は、1950年のアドルノらの記念碑的な研究（Adorno et al. 1950）に始まった。アドルノらはこの中で権威主義的パーソナリティを測定する指標としてF-スケールを開発した。しかしそれに対して、彼らが依拠した、フロイトのパーソナリティの形成が幼少時に起因するという理論に対する信憑性への疑問や、幼少時の経験と権威主義の関連が一貫しないこと、またFスケールとそれが説明すべき態度や行動との間のトートロジー的關係などに批判が出されてきた。

このような批判を受けて1980年代には、権威主義的パーソナリティは社会化の結果だと考えた、アルトメイヤーによる右翼権威主義指標（RWA Scale）の開発が行われた（Altemeyer, 1981, 1988, 1997）。それ以降、権威主義的パーソナリティや信念体系は、何らかの態度の表明への賛意・同調への意思を測定することで測定されるようになった。しかし、研究者による権威主義への理解の幅が広いため、その理論的なゆるさ、あいまいさが問題であるとステナーは指摘する。

例えば、権威主義は普遍的なパーソナリティの型なのか、それとも文化的社会化の結果なのか、どのような要因が不寛容を強めたり弱めたりするのか、権威主義自体何らかの気質なのか、それとも態度や行動の「結果」なのか決着がつかず、理論的な混乱に陥っているとステナーは指摘する。またアドルノをはじめとする研究者は、ある種の不寛容を心理的要因で説明し、権威主義的パーソナリティの存在を指摘してきたが、社会的危機の水準の変化や文化の違いなど環境条件次第で、権

威主義の反応が変わるという経験的諸研究の結果から、そもそもそのような不安定なものはパーソナリティ理論の中に位置づけられるのかという疑問も提出されている。また、文化間における違いの発現は、時に、合理的な社会化の違いによる説明を軽視し、「国民性」の違いに帰着させるような議論も呼んでいる（Stenner, 2005: 3-4）。

一方で、すべてを単純に社会化に帰することのできない現象もある。文化によってある信念を信じる度合いはばらつきがあるにもかかわらず、そのような違いを超えて奇妙な共通の特徴も確認されている。研究者たちは、人種的偏見と政治的、モラル的不寛容の間に強い関連を発見しているが、それらを共通に発現させるメカニズムは分かっておらず、単に社会化による「症候群」として措定されているだけである。

結局、権威主義はどこからきて、何を、いつ引き起こすのか、そしてどうやって測定するのかに関して、相いれない議論、矛盾する証拠が出ている状態であり、そのうち、どう測定するかに関してのみ過度な研究者の関心を引いているとステナーは指摘する。アルトメイヤーのRWAスケールについても、スケールの信頼性を追求するあまり、権威主義的気質の本質、起源、メカニズムに関する説明がおろそかになっていると批判している（Stenner, 2005: 4-5）。

これらに対して、ステナーは次のように提起する。まず、権威主義とはそもそも何か、という問いについて、集団の権威と一体性に対する、個人の自律性や多様性との間の適切なバランスをどう感じるかという個人的な気質（predisposition）に関する概念であると言う。ここでいう気質とは、ある対象や出来事に対する、あらかじめ存在する比較的安定した反応の傾向であるとステナーは措定する。そして多様性を否定し、他者に同一性を押し付けて集団の一体性を追求しようという傾向を権威主義的気質（authoritarian predisposition）とし、それこそが「権威主義」（authoritarianism）と名付けられるべきだと言う。そして、このような権威主義の極に対し、一方で、個人の自律性、多様性を追求する「リバ

タリアニズム（libertarianism）」の極を設定することができ、人々の比較的安定した欲求や好みは、この両極の中に位置づけられるものとした（Stenner, 2005: 14-15）。

次に、このような気質がどこから来るのか、という問いに対してであるが、ステナーはまず、人々が、ある結果を望むので、それに向けた社会的な過程を作ろうとするのか、それともある社会的過程を好むことにより、そのような結果が生まれるのかは分からないという。例えば、人々は、社会的一体性を実現するために、専制的な社会体制に従うのか、それとも専制的な社会体制を好むので、社会的一体性が生まれるのかは分からないということである。そしてそれらが様々な経路で、人々を権威主義とリバタリアニズムの次元のどこかに位置づける可能性があるが、人々がどのようにその次元にたどり着いたかは、研究の目的にとってはさほど重要ではないとする（Stenner, 2005: 15-16）。

また権威主義は何を生むのかという問いに関しては、ステナーは、まず、不寛容に対する気質と、不寛容な態度や行動を区別することが決定的に重要だと主張する。具体的には、権威主義（権威主義的気質）と、それに特有な人種的、政治的、モラル的不寛容の「表明」を区別するということである。我々は、人々の異人種や政治的反抗者、モラル逸脱者らに対する見方や態度の背後に権威主義的気質の存在を推定するが、しかし、それらの見方や態度は気質自体ではなく、あくまで気質の産物であるという。これらを区別してこなかったことが今までの理論的混乱や、実証的研究結果の矛盾を生み出してきたという。そして、権威主義的気質は単なる多様性への嫌悪ではなく、集団的権威と個人の自律性の間のバランスをどう考えるかという、服従や一体性への社会的価値に関する規範的な「世界観」であるという（Stenner, 2005: 16-17）。

さらに、権威主義がいつ発動するのか、という問いには、権威主義が同一性を最大化しようとするのであれば、集団的権威への不服従、集団において価値や規範に関する合意が失われたときに、

権威主義は態度や行動として現れるという。このような権威主義を発現する触媒として、ステナーは「規範の脅威」、あるいは「規範秩序への脅威」、つまり「私たち」を「私たち」とするような同一性 (oneness または sameness) システムへの脅威があると指摘する。そして現代社会においては、それらは共通の権威や共有される価値への脅威であり、権威や価値に対する疑問の発生ということになる。具体的には指導者への不敬あるいは、信頼に足らない指導者の存在、集団の価値や信念における、同一性や合意の欠落である (Stenner, 2005: 17)。

これらを回復するには、皆がある権威や規範に従う必要があるが、このように考えると権威主義とは究極的には「集団志向」ということになる。しかし、これは**特定の**規範秩序にコミットすることではなく、自分や他者が皆、**何らかの**規範秩序に一致して従うということ自体である点に注意する必要がある。従って、規範の脅威に接したときには、権威主義的気質を持つ者は、通常その権威体制を守るような態度や行動を活性化させるようになるが、その一方で、皆が既存の規範体系や権威に従うことができないと判断したときには (例えば「彼らは我々のリーダーではない」)、もし皆が追従しうる新たな規範体系や権威が現れれば、権威主義者は既存の規範体系や権威を捨て、新たな規範体系や権威に向かうこともありうるし、あるいは皆が追従しうるような新しい規範体系や権威を作り出そう (例えば「偉大なアメリカ」のように) とすることもある。この点で権威主義は保守主義とは区別されなければならないとする。つまり権威主義においては、保守主義と異なり規範体系や権威の内容は問題にならない、ということである。また皆が同一の権威や規範体系に従うことは、個人的というよりは集合的な事象であるとともに、ある過程というよりは状態である。したがって、ある集団において「個人の自律」を尊重するという規範に皆が一斉に (権威主義的に) 従う、ということもありうる。但しそれが権威主義の発動であると言えるのは、その集団において、暗黙のプレッシャーがその集団の行動を規制して

いるということが慎重に確認される必要があるという (Stenner, 2005: 18-19)。

またステナーは、規範の脅威の存在、不存在という触媒効果は、権威主義的気質自体を増やしたり減らしたりする効果はなく、あくまでも、もともと比較的安定した権威主義的気質を持つ者の態度や行動の発現を触発したり、しなかったりという効果しかないと論ずる (Stenner, 2005: 73-76)。

さらに、権威主義とは反対の、リバタリアンの存在にも言及し、リバタリアンとは、単に権威主義的気質を持たない人々のことではなく、逆に多様性が失われようとしたとき、積極的に多様性を擁護するために活性化する人々であると論じた (Stenner, 2005: 62-63)。

そして、このような規範の脅威に接して権威主義的気質が、不寛容な権威主義的態度や行動として現れるメカニズムを、ステナーは権威主義のダイナミックと名付けた。そして権威主義的気質を持つ者は、規範の脅威を感じないときは、不活性となるため、状況次第によってその態度や行動は大きく異なるとともに、権威主義的気質とは、多様性に対する不寛容な安定した個人的気質だとする。

このように特定の気質が、状況によって異なった形で現れるという仕組みは、ミッシュル、正田佑一らが提唱した「状況行動プロファイル」説 (Mischel, Shoda, Mendoza-Denton, 2002)、つまりパーソナリティとは、おおむね安定した個人間の差を指すのだけではなく、状況次第で行動が変わったとしても、特定の状況と行動の間に安定したパターンがみられるならば、それはパーソナリティとする説に合致するという。そして、権威主義のダイナミックは「状況行動プロファイル」の典型例だと論ずる (Stenner, 2005: 19-20)。

次に、権威主義をどう測るべきかという問いに関して、従来権威主義を測るものとして使われてきたアルトメイヤーによるRWAスケールに対してステナーは次のように批判する。RWAスケールの主要素は伝統主義であり、既存の伝統や慣習に対する保守主義的態度に関する項目が多く

含まれていると指摘する。しかも特定の権威や伝統に対するものを前提としているため、現状維持を志向する保守主義と権威主義の区別を放棄してしまっているとする。また一般には「右翼」とは所得再分配や平等に反対する概念とされるが、RWAスケールは、旧社会主義国で測定に使うと共産主義体制を擁護する態度を測定することになるのではないかと指摘する。そしてステナーは権威主義に所得再分配や平等に対する態度を含める必要はないと主張する。結局、「右翼」概念に、本来区別すべき権威主義、現状維持志向保守主義、さらに経済的新自由主義が入り混じっているため、見せかけの誤った結論を導くのではないかと批判する（Stenner, 2005: 21）。

さらに、RAWスケールは、権威主義的気質を測るものではなく、権威主義的態度を測るものであると指摘する。例えば、RWAスケールには、マイノリティー、反体制派、道徳的逸脱者に関する態度を測定する項目が含まれている。しかし、それらは、それこそこのスケールが説明しようとする権威主義的態度の集まりであるとする。したがって、権威主義的態度を説明しようとするRWAスケール自体に、アドルノらのFスケール同様、権威主義的態度を含んでいるため、トートロジーに陥っていると批判する（Stenner, 2005: 22, 72）。

最後に、RAWスケールは、非常に信頼性の高く、経験的に証明されてきた権威主義的態度に関するスケールではあるが、権威主義的気質を測定するものではないと断じる（Stenner, 2005: 23）。

このように考えてくると、権威主義的気質を測定するためには、まず、権威や団結 対 自律性と多様性のバランスに関して直接測定する、低レベルの測定法が必要となる。つまり、保守主義や従順さといった別の特性とは区別される権威主義自体を測定する必要があるということになる。さらに時代や文化的に限定された特定の体制や対象、出来事に依拠するものであってはならないとステナーは指摘する。

このような条件を満たす権威主義の測定方法と

してステナーは、子育てに関する価値観に関する質問項目を提言する。すなわち、子どもにとって重要なのはルールに従うことなのか、それとも自分の自覚に従って行動することなのか、あるいは、子どもにとって重要なのは、年長者を敬うことなのか、あるいは自分自身を大切に思うことなのか、といった一連の質問項目である。このような子育ての価値観こそが、個人の権威/同一性 対 自律性/多様性に対する根本的な志向を反映しうると主張する。但しそのような価値観は、回答者がどのように育てられたかや、子どもを実際に持っているか、そして実際に子どもをどのように扱っているかとは、関連する必要はないという。つまり、子育てに関する価値観が重要であって、子育ての実践との関連には必然性がないという。その意味で、初期の権威主義的パーソナリティ研究で、アドルノが論じたような、フロイト流の、権威主義と、子ども時代に厳格に育てられたこととの間の関連を認めるものではないとする（Stenner, 2005: 24-25）。

そして、このような権威主義のダイナミックモデルのみが、今までの理論的混乱や経験的調査の結果の矛盾を説明可能とするものであると主張する（Stenner, 2005: 33）。

なお、社会的脅威と権威主義との関連であるが、フロムが1941年に論じた『自由からの逃走』（Fromm, 1941 = 1952）の議論以来、数多くの研究が論じてきている。しかし、アルトメイヤーのRAWスケールに依拠する研究では、必ずしも社会的脅威と権威主義との関連に一貫した関連が見られていないのも事実である。また、これらの社会的脅威と権威主義に関する議論も多くは社会的脅威と権威主義的態度の間に直接の関連を措定してきた。しかし、これらに対しても、権威主義のダイナミックというモデルは代替的解決提案になりうると主張する（Stenner, 2005: 25）。

さらに、権威主義的気質を持つ人々は、必ずしも社会的脅威に敏感ではなく、むしろ鈍感であると指摘する。特に国民のあいだに生じる価値観や信念に対する亀裂に対しては、権威主義的気質を持つ人々は、心理学的に良く知られる「偽の合意

効果」バイアスが生じやすいという。したがって、権威主義的気質を持つ人々は、社会的脅威に敏感な人々ではない。あくまで、権威主義的気質を持たない人々がさほど社会的脅威であるとはみなさないような、特定の社会的脅威（＝規範の脅威）を一旦認知した場合に、非常に強い不寛容な反応を示す人々ことであるとする。

また、このことは、権威主義者が、単に政治的保守主義者であったり、あるいは知識が不足したり、社会階層が低位であったり、男性であったり、南部で育ったたりしたため、権威主義的な不寛容な態度や行動を示すわけではない、ということを示唆する。つまり規範の脅威という特定の経験上の要因は、他のいかなる個人属性や環境特性とも関連はないとする。

なお、ステナーは右派、保守主義として一括りにされ、かつそれによって研究結果のぶれの原因となってしまう、現状維持保守主義（status quo conservatism）、自由放任主義的保守主義（laissez-faire conservatism）、権威主義の区別も提唱する。これらは、政治政党の政策論争の下でセットとして扱われがちであり、それゆえ右派、保守主義として一括りされがちであるが、それらを一体として取り扱うのは党派による恣意によるものであり、そもそも原理的には異なるものであって、特に経済的リバタリアニズムは、あいまいな「政治的保守主義」概念から区別することが必要だと主張する（Stenner, 2005: 151-153）。

現状維持保守主義は、経験的には多様性に否定的になる傾向にあるが、その本質は変化を嫌悪する保守主義であって、主に伝統的に多様性に否定的だった社会において、そのような傾向が顕著なのであり、仮に、権威主義革命（つまり、多様性を維持する社会を、多様性を否定する社会に変化させようという革命）に直面すれば、権威主義との違いが明らかになるはずであるとする。これに対し権威主義的気質を持つ人々は、どのような場合でも多様性に対して不寛容な方向に動き、場合によっては変化をかならずしも厭わないという点で、保守主義とは異なるとステナーは主張する。また規範の危機が感じられず、安心できる状況で

は、権威主義的気質を持つ人々は、むしろ政治的には不活性化し、「良きに計らえ」と鷹揚になる傾向が見られるという。このため社会環境によっては、権威主義的気質を持つ人々に対して世論調査を行っても、非権威主義者と区別がつかないような回答を行うことがあり、これが右翼権威主義に関する研究結果のぶれにつながっていると指摘している（Stenner, 2005: 151-152）。

また自由放任主義的保守主義の基本的価値は富の再分配や平等、市場の価値の重視にあるのであって、権威主義とは異なっており、そのことは、実証データ上も権威主義とは弱い関連しかなく、異なった価値次元にあることが確認されているとする。とくに教育水準や収入が上がると、自由放任主義的保守主義である傾向があるが、権威主義はその反対だとする。そして自由放任主義的保守主義が保守主義に入れられるのは、右派、保守政党によって政策のセットとして取り扱われる以外の理由はないとする（Stenner, 2005: 154）。

4. 日本の政治イデオロギー研究に対してステナーの議論が示唆するもの

このようなステナーの議論から、日本の政治イデオロギーをめぐる社会意識研究にどのようなヒントが考えられるであろうか。すでに指摘したが、今日の日本の政治イデオロギー研究で大きな問題になるのは、年齢層によって共通した政治イデオロギー理解が失われていることである。伝統的には、日本の政治イデオロギー軸として「保守」「革新」、あるいは「右翼」「左翼」という言葉がつかわれてきたが、同じ用語を使っていたとしても、世代においてその理解される内容が全く異なっているとすれば、その背後にある概念も全く異なっていることになる。また、若年層で、そもそもこれらの言葉が何を意味しているのかよく分からないという人々が非常に増えている。同じ言葉であってもそれが指す概念が全く異なってしまっているとすれば、このような用語を使って行われる調査が得ているデータ自体もそもそも何を指しているか分からないデータということになってしまい、研究の基盤自体が揺るがされることになる。

このようなア・ポリティカル (a-political) 状況は、単なる政治的に無関心な人が増えている、ということにとどまらないかなり深刻な状況と言える。ステナーは、既に述べたように、よく使われる政治的保守主義概念のあいまいさを指摘している。すなわち、それは、多様性に対する不寛容を示す権威主義、変化に対する嫌悪を示す現状維持保守主義、そして主として経済政策をめぐる自由放任主義的保守主義に分けられるべきだとする。さらに、権威主義と自由放任主義的保守主義は、最終的な社会的目標に関する概念であるのに対し、現状維持保守主義は「道具的」な価値に関する概念であると指摘する (Stenner, 2005: 152-153)。また、権威主義と現状維持保守主義は前者が共時的な多様性の否定であるのに対し、後者は継時的な多様性の否定という点で共通点を見いだせるのに対し、自由放任主義的保守主義はむしろ自由/多様性を求めるものであり、大きく異なるものであるとする (Stenner, 2005: 151-152)。つまり、今日のイデオロギー理解のセットは恣意であるとの指摘である。確かに、旧社会主義諸国における「政治的保守主義」を考えると、そこには旧共産主義体制に戻りたい、というような理念が含まれるであろうことを考えると、このことは容易に理解されるだろう。

日本におけるイデオロギー軸の理解が世代によって大きく変わってしまっているのも、そもそも我々が前提としていたイデオロギー理解のセットが恣意的であり、あるいはその時代や国による政治状況依存的であると考えれば、決して不思議ではないと言える。つまり、現在の日本の政党が提示している政策セットが、従来の保守－革新、左翼－右翼といった枠組みを逸脱していると考えれば、かつてのイデオロギー対立の構図の記憶を持っている世代では、それを手掛かりに今の政治状況を理解している一方で、そのような記憶のない若年層では、理解が及ばないのも当然である。

ステナーの、今日理解されている「政治的保守主義」に複数の要素が含まれているのではないか

という主張を鑑みると、これは、今日の政治イデオロギー研究に、メタ・イデオロギー概念導入の必要性を提起していると考えられるのではないだろうか。つまり、現在提示されている政策セットを超えた、より本質的で安定的なイデオロギー概念の必要性を示唆しているものと思われる。

ステナーは、権威主義的気質という概念をキーにして、一筋縄ではいかない政治イデオロギー現象を解明しようとしている。これは、恣意的なイデオロギー的政策セットを超えて、権威主義の不思議な共通した特徴、つまり人種的不寛容と、政治的不寛容、モラル的不寛容がセットで現れるという傾向に対応したものであった。ステナーはこの不可思議な傾向の背景に、心理学的概念である人の気質 (predisposition) があると見たわけだが、いわばこれは、より深層レベルで働くメタ・イデオロギー概念と考えることができるのではないだろうか。

また、ステナーは、既に述べたように、「政治的保守主義」の中から、権威主義、現状維持保守主義、自由放任主義的保守主義が区別されるべきだと論じているが、その中でも、最終目標にかかわるものと、「道具的」側面、いわば過程にかかわるものという性質の違いがあることも指摘している。このことから敷衍して考えてみると、さらにより精査されたメタ・イデオロギー概念を考える余地があるということを示唆するのではないだろうか。松谷が論じた「右傾化なき保守化」という議論もこの観点から再検討されるべきではないだろうか。

さらに、ステナーのモデルは、潜在的要因と顕在的現象を区分して、何らかの触媒要因によって現象が顕在化するというダイナミックモデルを提起しているが、このようなダイナミックモデルに関しても、日本が「右傾化」しているかどうかを考えるにあたって再検討されるべきであろう。

文献

- Adorno, T. W., E. Frenkel-Brunswick, D. J. Levinson, and R. Nevitt Sanford. 1950. *The Authoritarian Personality*. Wiley.
- Altemeyer, B. 1981. *Right-Wing Authoritarianism*. University of Manitoba Press.
- Altemeyer, B. 1988. *Enemies of Freedom: Understanding Right-Wing Authoritarianism*. Jossey-Bass.
- Altemeyer, B. 1996. *The Authoritarian Specter*. Harvard University Press.
- Fromm, E. 1941. *Escape from Freedom*. Holt, Rinehart and Winston. (=日高六郎訳. 1952.『自由からの逃走』東京創元社)
- Jou, Willy and Endo, Masahisa. 2016. *Generational Gap in Japanese Politics: A Longitudinal Study of Political Attitudes and Behaviour*, Palgrave Macmillan (=遠藤晶久, ウィリー・ジョウ. 2019.『イデオロギーと日本政治: 世代で異なる「保守」と「革新」』新泉社)
- 松谷満. 2019.「若者:『右傾化』の内実はどのようなものか」. 田辺俊介編著『日本人は右傾化したのか』: 227-246, 勁草書房.
- Mischel, W., Shoda, Y. and Mendoza-Denton, R., 2002, Situation-Behavior Profiles as a Locus of Consistency in Personality, *Current Directions in Psychological Science* II: 50-54.
- Stenner, Karen. 2005. *The Authoritarian Dynamic*. Cambridge University Press.

注

- 1) 松谷は、若者を1969年以降生まれの世代と定義する(松谷2019: 234)。